

— 「日本の絹文化」の活性化のため —

# 伝統技術を現代に

有限会社 ミラノブ 笹口 晴美

## 【はじめに】

「今年もいい繭つくるからねえ」と、今年も元気に、ご夫婦は笑顔でこたえてくれた。自分自身、絹に携わるものとして一番の至福のときである。

このように弊社のものづくりは、この養蚕農家の笑顔からスタートする。

養蚕振興として、養蚕農家と年間特約契約をおこなうようになって、今年で4年目になる。創業以来、「地場の伝統産業である養蚕・蚕糸技術を現代に生かしたい」という思いで今日まで邁進してきた。「繭と生糸は日本一」と言



年間特約契約を行っている養蚕農家

われるように、日本一の養蚕県である群馬ではあるが、平成元年において15,500戸あった養蚕農家は、その後年々減り続け、平成10年には、1,930戸、平成18年現在では、557戸まで減少し、収繭量も平成元年は、7,602トン、平成18年現在では、225トンと激減している。2千年の歴史とともに育まれた「日本の養蚕」はどのようになってしまうのだろうか。

養蚕、蚕糸の技術は、日本のものづくりの文化の原点である。まさに日本の近代化を促し、製糸、撚糸、染色、織へと繋がり、かつて世界に誇る一大産地を築いた。

今こそ、川上から川上までの連携したものづくりの構築が急務であり、それを遂行してゆく中で、新たな道が開けてゆくのではないか。

厳しい現実と向かい合いながら、養蚕農家それぞれの笑顔に支えられ、今日があるのである。

## 【伝統技術の継承】

群馬県には、約200年の歴史ある「上州座繰り」という繰糸の伝統技術が存在する。座繰器には、「前橋座繰器」と「富岡座繰器」の2種類があり、生糸の使用目的によって使い分けられる。座繰器の「座」とは、“歯車”を意味する説と、腰を下ろして作業する“座して繰る”座繰りの二説があり、歴史的背景としては、歯車の設計に「江戸カラクリ」の技術が投影されているようである。



上州座繰り講習会

繰糸技術においては、煮繭、粹管理それぞれの工程に伝統技術が存在し、創る用途により繊細に変化する。「温故知新」といわれるように、原点に立ち返り、伝統ある技術を、過去のものとしてではなく、技術を正確に伝承し、現代に生かし、それを土台として発展させてゆくことが大切であると思う。

弊社は、伝統技術継承のため「上州座繰り講習会」を実施し、講習者には、技術の伝承だけでなく、繰糸から撚糸までをフォローし、「糸創り」の位置づけで、実践的に作品や、製品化できるところまでサポートしてゆく。